

法令より見たる津輕藩の町人の生活（上）

黒瀧 十二郎

目次

はじめに

一、町人に対する生活規制

二、衣食住について

(一)衣服の規制

(二)食・住の規制

三、年中行事と生活（以下、次号）

(一)宵宮

(二)盆踊り

(三)ねぶた

四、お山参詣

四、日常生活

(一)弘前城下の通行

(二)商業について

(三)質屋と藩士

四防火・治安対策

むすび

はじめに

本稿は弘前城下に住む町人に対する生活規制の分析（必要に応じて青森に住む町人の生活にもふれた）を通して、町人の生活の実態を探ることを目的としたものである。

弘前城は慶長十六年にいちおう完成し、城下は慶安期に現在の祖型を形づくっており、周辺農村とは在郷道で結ばれていた。慶安二年の寺町大火、延宝二年と天和二年の岩木川掘替え、元禄年間と宝永年間の二度にわたる武家屋敷の郭外移転、寛政改革による藩士土着とその後の城下への復帰によって、城下の景観は度々変更を余儀なくされたが、町屋・武家および寺社の配置は、十九世紀の初頭以後ほとんど変化はなかった。町人は同じ城下で居住域は異にするが、藩士と深く関りあいながら生活を営んでいたことは言うまでもなく、また周囲の農村と城下とを往復する農民との関りも深かったのである。

町人が毎日のことを丹念に書き記したものに、幕末の津輕藩の豪商武田氏の「金木屋日記」⁽¹⁾があり、生活の様子が知られる貴重なものである。これは詳細な日記であるにもかかわらず、藩から出された法令が町人にとどのように受けとめられ、如何なる影響を与えたか、などについてはほとんど記されておらず、知ることが出来ない。

町人の日記で筆者の管見に入ったのはこの日記以外にないので、多数の法令の分析が中心とならざるを得なかった。史料の限界はあるが、藩政中期以降を通しての法令⁽²⁾から津輕藩の町人の生活が、どのようなものであったかを把握することは可能であると考える。

尚、この考察は「法令より見たる津輕藩士の生活」(「弘前大学國史研究」第八十六号)「法令より見たる津輕藩の農民の生活」(未刊)との一連の作業である。

一 町人に対する生活規制

本章では、町人を対象とする主要法令が出された時期とその背景を藩政の動向を通して考察し、町人の生活が如何に規制されていたかを概観したい。但し、個々の箇条についての考察は次章以下に譲ることにする。

町人に対する生活全般に互る法令として、延宝九年正月二十一日の日付をもって「町人法度」が制定された。⁽³⁾

少し長いが全文を引用すると次のようになる。⁽⁴⁾

条々

御公儀常々御法度并年々被仰出御条目之趣聊違背不仕可相守事、

一、吉利支丹宗門之改、前々より一年に兩度宛申付候通、急度可相改、其内にも無心元儀有之者、早々町奉行所へ可申出候事、

五人組之事

一、町人以前より相定候通、五人組を定、互ニ自他相改家主下々共非分無道無之様可仕候、若五人組の内不届之者有之者、五人組加異見を不及了簡候は、年寄・名主相談の上に町奉行所へ可申断事、

一、五人組之内他所へ罷越、一夜相泊候共、五人組へ相断可罷越候、尤所を替、他国へ罷出候儀ハ、町奉行に相断、可任差図事、

一、近年巡礼拔参と号、五人組へも不相断罷出候事有之、向後五人組名主へ相断可任差図事、

一、五人組の家内へ他国之者切々往来、又者由緒無之輩与風参居候而隠居候歟、或は山伏・行者人ニ忍候跡の者罷有候歟、遊女等隠居候者早々町奉行へ可申出候、不然候而、御法度相背之者五人組共ニ迷惑可仕事、

一、從主人構有之者、宿借申者町奉行江可受内意候、尤往来之旅人一夜泊者不苦候、他国之者・浪人等宿を借り、二・三日も逗留仕候者、早々町奉行江可申出候、手負又ハあやしき者雖為一宿を不可借事、

一、借店表裏共に請人無之者不可借、縦請人有之者たりといふ共、不届者之様に及び候者、五人組之仲間互吟味可仕事、

一、五人組借店之内、不勤家職朝寝昼寝をいたし、夜歩行仕不届之者之ハ、親類共へ申断、急度加異見させ、不及了簡候者、町奉行へ可申出候事、

一、借地之事慥成請人を取、年季を定、重而違論無之様に可申合候事、

一、奉公人拝領屋敷為町人借地仕候儀、可為無用事、

- 11、新規之屋敷望之事、町家屋売買之事并金銀かりかし、五人組申合、可守町奉行所之定式事、
- 12、五人組仲間僉議之上、其所に勝れて親孝行成者・芸能の名人・医術之功者等有之者町奉行迄可申出事、
- 13、旅籠屋之事、定置所之宿之外可為無用事、
- 14、於町中召捕者など有之時分、役人之外かたく其場へ不可出会候事、
- 町人作法之事
- 15、每朝家之前、道筋急度掃除可仕候、尤五節句礼日者如作法道掃除等念入、往来之礼者^(ママ)へ無作法仕間敷候、往来之旅人者不及申、直参之面々亦若党たりといふ共、侍分之者に路次におゐて参合候者、慮外仕間敷候、商売之時分下々迄無礼不作法成言葉申間舗事、
- 16、町人いかつなる躰をいたし、武士に紛れ喧嘩・口論を好もの有之者、五人組僉議之上、町奉行江可申出事、
- 17、常々儉約を守、衣類・食物等随分輕可仕候、但定たる儀式祝儀事有之時分ハ、定式之通応分限振舞等可仕候、尤大酒乱酔等仕候者、過錢可申付候、委細町奉行可受指図事、
- 18、嫁娶之礼并葬礼年忌法事、分限より輕可仕事、
- 19、嫁娶并養子之儀に付、貧たる作法不可仕、尤妻女令離別候者其妻之金銀衣類等早速可戻事、
- 20、町人屋作之事、不応其身儀仕間敷候、但通り町並之儀者町奉行の受指図可作之事、
- 21、博奕并賭之諸勝負仕間敷事、
- 22、町人之手前に諸浪人拘置へからず、但由緒有之ものハ町奉行江相断

- 可任差図事、
- 23、辻立・門立不可仕事、
- 24、神事祭礼輕可仕候、附勸進・操・相撲等町奉行之受指図候而可申付事、
- 25、弘前惣構之内木草并俵物等馬に付、中乗仕通間敷事、
- 道橋之事
- 26、道橋往来之妨旅人之迷惑可仕処、常々掃除可申付、五人組計に而不相叶候者、其一町申合可勤之、其一町に而不罷成所者、町奉行江可申断事、
- 27、大雨長雨之時分ハ水やりを見届、水湛不申様ニ可仕候、道之ぬかり候所者五人組申合候而道を作り、往来之者迷惑不仕候様可致事、
- 28、大雨洪水之時分、小橋落不申候様土俵石を置、堅可申候、橋浮立候而流可申候者、申合、橋を繋留可申候、五人組計に不限、其所近き一・二町之間申ふらし、右之通に可仕候事、
- 29、路次中倒れ者、酒狂者・乱氣者・急病人有之者、御定之高札之通可仕事、
- 30、於路次非人・乞食等、妨往来、不作法不仕候様に可申付事、
- 31、木戸有之所者、朝夕之立明可入念、最^(オ)盜人等有之者、合図次第早速木戸を相改可申候、若木戸柵損申候者、定之通修復可仕候事、
- 伝馬馬次駄賃錢人足諸役之事
- 32、右高札に具に出候、可守其旨、諸役儀・役銀等従以前相定候通急度可相勤、但年により町中迷惑仕事者町奉行迄其旨可申断事、
- 商売物之事

—33、諸色一所に買置、~~ノ~~売仕間舗候、尤申合候而諸色高直に仕候事、并諸職人作料・手間賃申合高直に不可仕事事、

—34、丈尺舛秤、御公儀御定之通私之器を拵申候者可為罪料事、

—35、布木綿絹袖幅長、御公儀之御作法之通可相守事、

—36、誂者諸色請取置候者、日限之通精を出可令出来、若不仕候而申延候者可為曲事、

—37、往来之旅人江商売之事他国之ものたりといふ共有様に申候而売可申候、必高利を取申間敷事、

—38、買手金銀計目の違ヒ定より過分ニ出候敷、金銀銭失念仕、其処に残置候者早々其者を尋可遣候、先之者知れ不申候者、五人組申断、其上に町奉行へ可申出事、

—39、相定所之諸運上之外、所々者迷惑仕儀候ハハ町奉行迄可申出事、

—40、御定之御印之外、町人密々に百姓申合、鳥獸を盗取候事、尤所にて

売買致し、又ハ他国へ遣し候儀堅可為罪料、左様之儀脇々より訴人有之者、其身ハ不及申、五人組迄御かゝり可被成候事、

—41、於途中衣服・刀脇指其外、怪敷もの売買仕間敷候事、

失火之事

—42、町々常々火の用心堅仕、昼夜之番夜廻相定之通、急度可相勤事、

—43、五人組互に相改、火之用心無沙汰に仕候者は町奉行へ可申断、尤風有之時分、家主昼夜ニ不限家之廻見廻り可申候、むさと紙燭をともし、其外火を無沙汰に仕間敷事、

—44、出火之節見付・聞付次第にもミけし可申候、其場により、出精候輩には御褒美可被下候、尤自分之道具かまひ早速出火之場へ不出合輩ハ、

可為曲事支

—45、揉消申事不罷成候者、火消之役人走付候迄者其場を立退申間敷候事、役人参候以後者、自余之輩一切不可馳集事、

—46、火之場へ参候者、親子・兄弟・舅・贅・小舅・祖父・孫・伯父・甥・従弟并其町人の下人の外、出合儀一切仕間敷事、

公事之事

—47、町人出入沙汰之儀者五人組能々下に而取扱、無事に可仕候事、

—48、公事人・老人・若輩・慥成病人之外、介副之もの無用之事、

—49、屋敷堺論五人組は不及申、一町之者出合可為証拠次第事、

—50、町人其身之下人与出合之事、下人主従之礼を不存、尤可為非分、但主人段々不屈有之、

—51、ヤ町人其身の下人と出合之事、

—52、公儀は不及申、町中へ対し不可然事有之者ハ格別の事、

—53、謀判・似せ手形等可為死罪、慥成証文・証拠等有之儀不存知、申掠候者其五人組能々吟味可仕候、若五人組其様子存知候而一味仕、公事仕せ候ハ本人より可為重料事、

—54、御法度之事訴人申出候者、雖為同類咎を赦、御褒美可被下事、

父子之事

—55、親之申付を不承、五人組之異見を不用候悴ハ仲間に而僉議之上、町奉行所へ申出、可受指図、若右之段、親へ遺恨を存候悴ハ可為死罪事、

—56、町人の悴口論不及沙汰、双方親共へ急度可加制止、若親共互に申募、言分仕候者可為曲事支、

—57、幼少之世悴刀傷人殺之事不存奇怪我ニ候者、幼少之者不及是非、十

三歳以上者は又可為死罪事、

—57— 父子之出入、五人組取扱候而可任親所存、但親之仕方重々非分有之者、五人組僉議之上、親又可為曲事、

—58— 親之咎に懸事勿論也、子之咎は不可懸親、但於大罪者可為格別事、

跡式之事

—59— 町人諸職人共惣領に跡式可申付、若所存有之者存命之内五人組へ相断可申候、尤養子の儀前方五人組相談之上、年寄・名主迄相断可申候、若日頃断置候共、其子細不屈之儀有之、跡式遣申間敷候もの、是前方可申断、及末期筋目違たる遺言申立間敷事、

—60— 遺物配分之事、其身存命之内五人組へ申断可置候、金銀財宝・家屋敷等者証文載可申候、縦一類たり共存命之内不申届候而、死後之心入不可用事、

—61— 男存命之内老年におよび、養子之沙汰不仕候而末期に相統之者無之者、後家ハ不及申、五人組可為曲事、但子細有之而相統之子無之、家屋敷・家財後家令支配者、五人組相談之上、男之一類養子たるへし、然に左様之所無之、無程無作法出来、又者再嫁等之儀可為曲事、
—62— 後家分之家財遺物、兼日五人組に可申断事、若親類に不讓、師壇と名付、旁寺方・出家へ過分に遣事不可然事、

奉公人之事

—63— 町人下々を召仕事、尤請人可有之、請人無之ハ不可拘置候、奉公人出替は、御公儀御法度之通可為三月五日事、
—64— 年季之事、御公儀御法度之通不可過十ヶ年、尤一季居法度之事、
—65— 奉公人召置候者不限男女、宗旨承届、寺手形急度取置可申事、

—66— 欠落者之諸人咎之輕重に隨、手形証文ニ隨、急度可相守事、

—67— 先主の構有之者、欠落者、一切不可拘、若乍存拘置者可為曲事、

—68— 町人奉公人之請に立候者、宗門を改、下請を慥にとり、請人に立可申事、

—69— 人之売買高札之通堅御制禁之事、

喧嘩之事

—70— 町人共喧嘩口論堅仕間舖候、若仕出候ハ、其処之五人組出合取扱可申候、若死人有之者、不論理非相手可為死罪、一方逐電仕候者、請人五人組尋出し可申事、

—71— 往来之輩町中にて喧嘩有之ハ、双方立退不申候様に仕、早々町奉行へ可申断事、

—72— 往来之旅人町人与口論等令出来者、所之者早出合取扱無事に可仕候事、

—73— 辻切・敵討等有之者、是又相手退不申候様に可仕候、討れ候者之死骸等者如作法引散不申片付置、可待町奉行之指図事、

—74— 家中之下々喧嘩之上、町屋へ駈込候者有之者、不取込様に仕、主人より付届次第返可申事、

—75— 親を殺、主人を殺候者、火を付候輩、從類迄可為死罪事、

—76— 妻敵之事、其所にて討留候者、不可有子細、其外証拠不分明者窄鑿之上、男女同罪之事、

—77— 徒党之事、如何様の訴訟申上候共、結徒党申間敷候、若結徒党候者訴訟之不理非に、或一同或党取之者可処罪科事、

—78— 借物質物之事、借物ハ可為証文次第、質物之儀能々相改、慥成物は

可取置、若盜物等有之者如作法可仕事、

一、落書之事堅不可仕候、雖為幼少之者、風説落書等持扱^(仰)出候者可為曲事支、

右之段、從以前年々雖申付来候、今度就御代替、弥如此申渡候之間、諸事入念可相守者也、

延宝九年^{辛酉}正月廿一日

(傍註筆者)

以上、この法度は項目にして、「五人組之事」「町人作法之事」「道橋之事」「伝馬馬次駄賃錢人足諸役之事」「商売物之事」「失火之事」「公事之事」「父子之事」「跡式之事」「奉公人之事」「喧嘩之事」の十一項目からなり、合計七十九カ条である。

制定された時期は、弘前城下の形成という面から見ると、町割りの拡大と共に城下の整備が進んできた段階にあたっているといえよう。⁽⁵⁾

また、この法度は農民に対する「農民法度」⁽⁶⁾、寺社に対する「寺社法度」⁽⁷⁾（寺院法度とも）と同年月日に制定されたことと考えると、四代藩主津軽信政の藩政確立期の所産であり、町人統制の基礎となる基本法ともいうべき重要な法令である。

次に衣食住を中心とする法令を見てみたい。「弘前藩庁日記」⁽⁸⁾寛政二年二月十一日の条に左のように記されている。

一、弘前町奉行青森町奉行・鰯ヶ沢町奉行江於時計之間相渡候書付左之通、

覚

町在浦々之者共、近年緩ニ罷成侈及増長、分限不相応之着服、猥ニ着服致候様相聞得不届之至ニ候、是迄者心得違茂有之哉ニ候間御用

捨を被加候、惣而郷役村役ニ相拘候御用等相勤候儀者、兎哉角難涉之旨申出、御取扱ニ相成候、下々之者と乍申心得違之至ニ候、自分銘々婚儀等相整候節者、上を不憚善美を尽し候致方有之旨相聞得不埒之至ニ候、凶年後別而難涉之時合ニ付、一統質素いたし、無用之費茂無之候ハハ、自然与手繰茂行届、町役ニ相拘り候御用等者無遅滞相勤可申事ニ候、分而妻子共儀者奢増長致し、唯外聞を而已心懸々、町家之本意を失ひ、無益之費有之旨相聞得候、必竟婦人之奢際限茂無之所より内々不取メ不手繰に相成、且者御用方相勤候ニ茂不時之御取扱ニ茂罷成候儀共数多有之候、向後心得違之者無之様、此度美服之儀御改被仰付候通、以来急度可相嗜候、

吉凶之出会等ニ至迄、大惣之規式構敷儀共有之旨相聞得候、都而平生出会者勿論婚姻等其外仏事等に至迄、一汁二菜不可過之、随分儉約を加へ、侈構敷儀決而無之様、町々一統申合、町役ニ而茂此上精々沙汰之上制法差立急度不取戻候様、嚴重ニ致候様申付候、

一、遊山芝居等江罷越候而茂無用之器物等持はこひ料理構敷仕向有之様相聞得候、向後右躰之儀無之様、自分銘々手輕ク致し、目立不申候様申付候、弘前并在々浜々之者共湯治先等ニ而右嚴重之被仰付を急度相守、美服等不致候様申付候、町々惣而近年家具并酒器等甚以美麗之諸道具数通り持合候而、平躰之出会等ニ茂結構之道具を相用ひ、以之外奢侈之風俗ニ相成、銘々身上相身分を茂不相并致方等茂間々有之旨相聞得候、依而此度奢侈之風儀急度御改被仰付候間、是迄持合之者たり共平躰客対等ニ茂、右結構之器物決而而此末不相用候様數被仰付候、右之通急度可被申付候、

戌二月

覚

御用達并名主役之者、御目見席江罷出候諸役人、尤當時御目見無之共、前々御用方茂相勤候家柄之者、惣而當時身上柄大家之者之分者、下着小袖着用御用捨被仰付候、乍然目立候衣服者急度御停止被仰付、絹紬太織等者相用、右之外妻子共迄着用不致候様申付候、

但上着之儀者、木綿之外紬たり共決而着用無用申付候、

一、上着木綿之儀者、男女とも決而絹裏相用不申候様、表裏共木綿着用候様、右之外諸町人之儀者、男女一統絹類決而着用不致外様申付候、

一、下着小学袖御用捨之者之妻子とも、小袖裏絹猥ニ相用不申様、以来品々左之通急度停止申付候、

浅黄絹紫絹桔梗色桃色并模様等有之絹裏者紛敷候ニ付停止申付候、紅裏之儀者御用捨被仰付候間、結構之品者不相用候様、

惣而下着小袖着用致候共、何色にて茂無垢小袖着用無用致候様、女帯腰帶等迄近年至極奢侈ニ罷成、種々之織物を相用ひ候、是又以来緞子縹子琥珀紗綾之外腰帶迄右準候様、此外決而相用不申候様ニ、是迄結構之品持合候共、着用之儀是又身上柄之外着用停止申付候、但御用方相勤候諸町人之儀ハ是迄之通、

一、仲買并日雇渡世之者、羽織着用無用申付候、右者以来町家之ものとも着服御定被仰付候間、全心得違無之、往々右之通相守、猶又町役に而も無怠吟味致候様、

右之通被仰付候間、此旨急度可被申付候、以上、

戌二月 (下略)

右によれば、前半の「覚」は衣食を中心とした内容の質素儉約令で、後半の「覚」は上は御用達から下は日雇までにわたる、より細かな衣服儉約令となっている。「下略」の部分の中に農民に対する儉約令がある。「日記」同年二月二十九日の条によれば次のように見える。

(上略)⁹⁾

一、町中惣名主申出候、

覚

◎御用達町人

一、上着表木綿裏絹、

一、下着郡内嶋、

一、綿入羽織小紋紬并紬嶋、

一、袷羽織小紋兜羅綿綿呉昌、

一、夏羽織小紋縮緬并絹羽織、

点羽

上着之儀、年頭計絹裏御免被仰付度奉存候、郡内嶋之儀、嶋柄目

立不申品御免被仰付度奉存候、

小紋紬并紬嶋之儀者、御差留可被仰付哉、

兜羅綿綿呉昌計御免被仰付度奉存候、

◎町々名主并御目見席江罷出候町人旧家之部、

一、上着表裏共木綿、

一、下着郡内嶋、

一、袷羽織綿呉昌兜羅綿之類、

一、綿入羽織綿呉昌并木綿、

一、夏羽織小紋縮緬并絹、

点羽

上着之儀者、申出之通被仰付候様、

一、郡内嶋之儀者、御免被仰付度奉存候、

一、袷羽織之儀者、申出之通被仰付度奉存候、

一、縮緬夏羽織者御差留被仰付度奉存候、

◎町々大家之者并御用掛町人、

一、上着表裏共木綿、

一、下着染絹、

一、綿入羽織袷羽織共木綿、

一、夏羽織絹、

点羽

此田口申出之通被仰付候様、

◎綿服ニ而上下御免之者、

一、綿入羽織袷羽織共木綿、

一、夏羽織布、

点羽

但大家番頭之もの右ニ準候様、

◎右以下金売仲買并右準候小商人、

一、羽織袴御免、尤右之者共婚姻亦は不幸之節者、亭主分之者上下御

免、

点羽

羽織之儀御免被仰付候様、袴之儀御用ニ而御役所廻町年寄宅江相

詰候節者、袴着用仕候様、

一、婚姻亦者不幸等之節者、大札之儀ニ付、上下着用之儀者、申出

之通御免被仰付度奉存候、

◎右以下小売仲買取壳触壳商売之者、

一、年始羽織御免、

点羽

此ヶ条申出之通被仰付度奉存候、

右以下之者一統羽織御差留、

一、男女子供之儀拾歳位迄縮緬帶、

点羽

幼少之内申出之通御免可被仰付哉、

一、老女之分、緞子等之類模様付相成不申候間、縮緬帶右者下着御免

之者之妻子、

点羽

此申出黒萌黄等者御免可被仰付候哉、

一、縮み緬腰帶之儀者、老若共綿服上下御免之者共妻子迄、

点羽

此ヶ条申出之通御免可被仰付候様、

右ニ付、三奉行申出候者、此度町在之者共着服物御定被仰付候ニ付、

諸組代官并当町名主共より之別紙兩通兩奉行ニ而点羽付ニ而申出

候、右之内兜羅綿綿呉昌和織相用、凡而渡物者堅着用不致候様、其

外両奉行点羽之通被仰付様奉存候、此段申上旨申出之、沙汰之通申付旨申遣之書付三奉行江申遣之、
(◎印筆者)

この二月二十九日の条の衣についての儉約令は、前者即ち二月十一日の条より詳細であり、しかも同月に出版されていることから両者の規定は深く関りのある一連のものと考えられる。

既に述べた延宝九年の「町人法度」の制定後から寛政二年二月迄に、町人を対象とする衣食等についての簡単な儉約令は、「日記」元禄八年九月二十三日の条、享保十一年十二月二十八日の条、明和六年二月十六日の条等々、出されてはいる。藩財政の窮乏による藩士を対象とした衣食住を中心とする寛政二年以前に出された儉約令は、詳細なもの、簡略なものを含めて再三出されている。¹⁰⁾納税の徹底化をはかつて、農民に対する儉約令も、藩士と同様に出版された回数が多い。¹¹⁾

かくて、町人を対象とした詳細な衣の規制を中心とする儉約令が、延宝九年から一〇〇年余も経過した寛政二年に出されたことは、重要な意味をもつものと考えられ、検討する必要がある。それについて関係部分を左に示そう。

「日記」享和三年八月七日の条に、¹²⁾

寛政二戌年町在浦々之者共奢及増長、分限不相応之衣類猥ニ着用致候ニ付、其節書付を以厳敷僉服着候儀申付候処（下略）、

とあり、「日記」文化四年十二月十五日の条には次のように記されている。

（上略）右御定之趣ニ相反し不申候様、其外之儀も諸事寛政二戌年二月被仰付候通、一切奢構敷儀無之様厳敷可申付候、

十二月

前者の享和三年八月七日の条は、農民・町人宛に出された衣食住についての儉約令であり、後者の文化四年十二月十五日の条は、藩士・農民・町人・寺社宛（上略の部分に記されている）の衣食等についての儉約令である。この両者に寛政二年二月十一日の条の儉約令（二十九日の条ではなく、十一日の条を意味すると考える理由は第二章（一）参照）が引用されているのは、文化四年段階まではこの規定が一つの基準になっていたことを示すもので、主要法令であると考えたい。さらに、その後に出された儉約令の分析によっても、十一日の条の儉約令が基準になっていると推定できる（第二章（一）参照）。

また、この寛政二年二月十一日の条は、藩財政の窮乏による藩士の生活困窮に対し、逆に次第に経済的実力をもつに至った町人の奢侈を抑えるために出されたものであったと考えられる。それは封建社会に於ける身分秩序を維持することでもあったのである。

寛政二年の儉約令以後、幕末までに出された衣食住を中心とする法令を拾ってみると左ようになる。「日記」享和三年七月十二日の条（衣食住、藩士対象）と「日記」享和三年八月七日の条（衣食住、農民・町人対象）に見える両規定は、それぞれ対象が異なるので、その規定内容も異なるのは当然であるが、ほぼ同時期の領内支配のために出された一セットとして考えることができる。¹³⁾

そのほかに「日記」文化四年十二月十五日の条（衣食その他、藩士・農民・町人対象）、同八年九月一日の条（衣食住その他、士・農・町対象）、文政十年十二月二十八日の条（衣食その他、士・農・町対象）、天保十二年十二月二十九日の条（衣その他士対象、衣食住その他農・町対象）、

弘化三年三月二十七日の条（衣・家業・商売その他Ⅱ町対象、衣食住その他Ⅱ農対象）、嘉永六年十二月十一日の条（食その他、士対象）、同年十二月十七日の条（衣食その他、農・町対象）、同七年一月二十四日の条（食その他、士対象、同六年十二月十一日の条とほとんど同じ）である。最後の嘉永六年の両規定は享和三年のものと同様一セットとみてよいと思われる。

以上のことから、寛政二年、享和三年八月、文化四年、同八年に出されたものは、津輕藩の寛政改革（天明四年～文政八年）の一環としての、町人に対する奢侈を抑制するための儉約令であった。それは階級社会に於ける身分秩序維持のためであったと考えられる。さらに天保十二年、弘化三年、嘉永六・七年に出されたものは、天保十年に始まる津輕藩の天保改革の一環としての儉約令と見てよいと思われる。

これまで指摘したそれぞれの年に出された生活規制には、衣・食・住のすべてについての規定が常に揃ってはいないが、衣が食と住に対するよりも詳細であることは、藩士・農民・町人宛共に共通している。

食については、具体的に料理の内容が時と場所に関係なく目に見えるというわけには行かず、食事の規制では身分を区別しがたい点がある。

住は弘前城下に於いては、町屋と侍町とが分かれており、身分不相応の家屋造ったとしても翌日すぐ改築など変更できず、身分秩序維持には衣のように効果的でなかった。

右の両者に比較して衣は容易に変更が行われやすく、また人の目にふれるもので、身分差も不分明になりやすかった。そのため衣服を身分ごとに統制することにより、藩士・農民・町人の身分制度の維持を

はかると共に、それぞれの身分内の階層をも秩序づけようとしたものであり、それは封建社会の秩序を保つために効果的であったといえよう。⁽¹⁴⁾

以上述べたことをまとめると、延宝九年に基本法としての「町人法度」が制定されているが、寛政二年以降に出された町人に対する生活規制は、藩士・農民を対象として出されたものと深い関連をもつものであり、⁽¹⁵⁾ 儉約の徹底は町人の身分秩序維持をはかるためのものであった。それは動揺する藩体制をあくまでも維持するために、町人に出された規制であったと思うのである。

註

(1) 八木橋文庫蔵。

(2) 藩政初期の史料が欠如しており、藩の公式の日記が書かれるのは寛文元年以降である。したがって本稿では寛文期以後を対象とする。

(3) 寛文元年に制定されたことが「弘前藩庁日記」「国日記」（市立弘前図書館蔵）に記されているが、その内容は全く見えない。「町人法度」の成立とその間の事情については、拙稿「津輕藩「御定書」の成立とその意義」（弘前大学國史研究「第六〇号」）を参照されたい。

(4) 「御用格」／＼寛政本（市立弘前図書館蔵）巻十三を底本とし、同館蔵の二種類の「要記秘鑑」と校合・補充して作成した。便宜上、条毎に番号を付した。以後引用する際はすべてこれによる。

(5) 註(3)の拙稿による。

(6) 「御定法古格」下、「御定法編年録」(共に市立弘前図書館蔵)所収。六十五カ条であるが、六十六カ条とも考えられる。

(7) 「御用格」(寛政本) (市立弘前図書館蔵) 卷八、「御定法古格」下、「御定法編年録」(延宝九年とのみあつて月日の記載なし)。十三カ条からなる。

(8) 市立弘前図書館蔵。「江戸日記」と「国日記」の二種類あるが、本稿では後者を指すものとし、引用する場合は「日記」と表現する。

(9) (上略)の部分、農民に対する規定で、点羽がつき二月十一日の条に見えるものよりも詳細である。

(10) 拙稿「法令より見たる津軽藩士の生活」衣食住を中心として」(弘前大学國史研究 第八十六号)を参照のこと。

(11) 「法令より見たる津軽藩の農民の生活」として発表予定である。

(12) 註(10)に同年月日の史料は示されてあるが、その(中略)の部分に記されている。

(13) 註(10)参照

(14) 藤川澄子「久留米藩の衣服統制」(大阪大学経済学 第三十五巻 第四号)

(15) 註(10)参照

二 衣食住について

(一) 衣服の規制

全国的に見ると、正月の廻礼や婚礼・葬礼・祭礼に於ける礼装には、

五郎丸・麻・絹製の袴か、黒羽二重五ツ紋の羽織袴を用いており、袴より略装となるのが羽織袴である。これらを着用したのは一部の町人と思われる。羽織袴に次いで小袖と袴の組み合せ、小袖と羽織の組み合せ、小袖のみという順に略装となる。夏には浴衣を用いるのがこの時代の特徴であった。生地の種類で見ると、一般の町人は絹・紬・木綿・麻布を分限に応じて用いていたのである。⁽¹⁾

津軽藩の町人を対象とする衣についての規定は、第一章に記した延宝九年の「町人法度」第十七条が現存する最も古いものである。即ち「一、常々儉約を守、衣類・食物等随分軽可仕候、(下略)」とあり、抽象的に表現された儉約令である。その後の具体的な規定を年代を追って見ていくと、「日記」寛保三年八月十六日の条に、

一、(上略)百姓町人之分御目見ニ罷出候節、年始節句并祝言相整候節、右四ヶ度外麻上下着用無用之事、

一、町人衣服輕申付候事、(下略)

とあり、右の規定は有力町人に、左は一般町人に対するものと思われる。

さらに「日記」明和五年三月九日の条に次のように見える。

一、今日於御用所に、郡奉行町奉行ならひ九浦町奉行江、(月番の用人)吉村場左衛門相渡候御書付左之通、

寛

弘前并在浦々町人着服之儀、近年猥に相成、絹類着服不苦様相心得候者茂有之様に相聞得候、御家中に而茂応分限に御定茂有之候条、猶以町々にて者一統綿服着用可致事候間、以来御用達初一統綿服着用羽織袴に至まで僉服可相用候、勿論常々出会等茂質素いたし、奢ケ

間敷事無之様相心得、銘々家業相勤可申候、(下略)

(傍註筆者)

右によれば、すべての町人に木綿の衣服を強制し、有力町人へは羽織袴に至るまで質素なものを着用するようというものである。

これは前年の凶作により、儉約令の一環として町人の奢侈を抑えるために出されたものと思われる。

具体的で、且つ詳細な規定として、基準になったと思われるのは、幕末まで影響を与えた(後述)「日記」寛政二年二月十一日の条(規定は第一章参照)である。それを要約すれば左のようになる。

○御用達及び町名主等の有力町人——下着は小袖着用とする(絹・紬・太織等は許可)。但し、色付きで無垢仕立の小袖を着用するのは認めない。⁽³⁾上着は木綿製のみ着用。

○仲買及び日雇の者——羽織の着用は許可しない。

さらに「御用格」(寛政本)卷十三「衣類之部」寛政二年二月十一日の条には、「日記」同年月日の条(第一章参照)と同じ文言の外に、左の部分が見える。

- ①、夏物の儀、是又近年町方妻子共紹之帷子着用致候者茂有之旨相聞得候、是又右鉢之品着用不致、通例有来候麻帷子着用、其外男女共堅ク着用仕候儀停止申付候、
- ②、夏羽織之儀、重立候亭主分⁽⁴⁾之者絹羽織着用不苦候、右以下一統布羽織相用候之様申付候、
- ③、一、町医之儀、是等ハ制外之者ニ付、是迄之通女共之儀者、重立候町人之妻子之通相心得候様、

④、召仕手代共之儀者、冬は上張浴衣着用致せ、夏ハ単物着用仕、帷子并羽織之儀者着用不致候様、尤地布帷子着用致候儀不苦候、

但羽織之儀者夏冬共停止申付候、

⑤、年頭五節句自分祝儀等ニ而上下着用之儀、是又身上柄之外着用停止申付候、

但御用方相勤候諸町人之儀者は迄之通、

右の五カ条を整理すると次のようになる。
(①～⑤の番号は筆者による)

①夏の衣は麻帷子の着用(有力町人と一般町人の区別は不明)。

②夏羽織—有力町人は絹羽織、その他は布羽織の着用。

③町医は特別扱いで従来通り、女達は有力町人の妻子の扱いと同様にする。

④召使・手代は冬—上張浴衣。夏—単物。

帷子及び羽織の着用は許可しないが、地布(麻)帷子は認める。

⑤有力町人は年頭・五節句等に裱着用の許可。

「日記」寛政二年二月十一日の条は、右に述べた「御用格」同日の条の部分を加えて、より正確な記録になると考える。

このように不完全なままで記されているのは、次のような理由による。即ち「日記」は、日記役創設当時は毎日記録されたものであるが、行政組織の拡大と職制の確立から、その日の書類をその日に処理することが不可能となり、次第に遅れて清書する関係から誤りが生じたのである。それは、「日記」享和三年八月七日の条、文化四年十二月十五日の条、文化八年九月一日の条等に見える詳細な衣服規制との比較から

も言えるところである。

「日記」寛政二年二月二十九日の条（規定は第一章参照）は、同年二月十一日の条よりも詳細で、両者に深い関りがあることは既述したが、比較すると大綱がほとんど異ならないので敢えて述べることはしない。藩より衣服規定遵守を徹底させるために出された法令は、幕末まで枚挙に遑がないほど見られる。

「日記」寛政二年四月二十八日の条に、衣服規定違反の具体例が次のように記されている。

一、三奉行申出候、近年在町之者共、奢侈之風俗不相止、当春改而御触之處、当月十七日青森町之者男女八人身分不相応之衣類着用之者有之、同所町同心共見当、右衣類取押町役江預置候旨、猶又為呵町奉行より戸ノ申付候段申出、書付御渡沙汰被仰付候、何連茂当春御触之通、身上ニ応し過料被仰付候様、尤同所町奉行江相尋候処、右八人何連茂小家之者共候間、為過料人夫為差出青森新町通堰粉上被仰付候様、右過料被仰付候上者、同町町奉行より申付戸ノ差許候様、（下略）

右によれば、青森町に住む男女八人が、前述の寛政二年二月（十一日）の条と二十九日の条のどちらか一方をさすのか、両方をさすのか（不明）の儉約令に違反したことが発覚した。しかし、右の史料からは、どのような衣服を着用していたのか不明である。彼等は「小家之者共」即ち下級の町人であるため、戸ノの刑の代りに、人夫として青森新町通りの堰粉（堰につまった泥か塵芥のことか）を路上にあげて清掃することを命じられたものと推定される。

このことから、町人に対する衣服規定の遵守を徹底させようとする藩当局の姿勢が知られよう。

「日記」享和三年八月七日の条⁽⁶⁾、文化四年十二月十五日の条、文化八年九月一日の条、文政十年十二月二十八日の条に見える衣服規制は、既述の「日記」寛政二年二月十一日の条及び「御用格」同年月日の条とほとんど同じである。これら寛政・享和・文化の衣服規制は、天明四年から文政八年にかけて実施された津輕藩の寛政改革の一環として出された儉約令の一部であり、次第に経済的実力を備えてきた町人の奢侈を抑えるためのものであった。

「日記」天保十二年十二月二十九日の条に見える有力町人対象の規定は、「日記」寛政二年二月十一日の条と同内容であり、一般町人対象の規定は、「日記」享和三年八月七日の条とほぼ同じである。

但し天保十二年十二月二十九日の条の中に次のような規定がある。

一、在町重立之者たりとも、踏込ニ紛敷品着用不致候様、御家中ニ紛連候品相用得候之者於有之者、急度御咎可被仰付候、

右の史料に見える踏込^{ふみこみ}は踏込袴のことと思われる。これについては、男子が羽織を着用する際に、袴の種類の一つに野袴がある。それは裾に黒ビロードの縁をとり、地質は鍛子・錦などから縞木綿にいたるまでの各種があつて、武士の旅行用に用いられ、また火事装束としても着けられた。町人でも公役出仕の折にはこれを着ける風がある。野袴の裾の細い仕立のものを踏込袴（略して踏込とも）といわれている。⁽⁷⁾

右の規定は有力な農民・町人を対象としているが、藩士が着用する踏込と間違われるようなものを着けるのを禁じた内容である。

したがって、衣類の種類によつては、有力な農民と町人が同等に扱われ、彼等と藩士とが区別されていたことが知られる。

「日記」天保十三年九月十二日の条に左のようにある。

一、在町浦々重立之者共、夏絹羽織相用候様、可成丈布羽織着用候様、
昨年被仰付候得共、以来重立ニ而茂夏者一統布羽織着用候様、尤絹
羽織差留申付候、冬者並木綿着用候之様、紐者木綿紐相用得候様改
而被仰付候間、支配頭ニ而時折心付心得違之者無之様、此旨可被申
付旨向々江申遣之、

右によれば、有力な町人すべてが、夏はこれまでの絹羽織をやめて布
羽織を、冬は生地では並木綿を着用するよう命じられたものである。「日
記」嘉永六年十二月十七日の条にも同じものが見える。

このように布羽織の着用は、前述の「御用格」寛政二年二月十一日の
条「一、夏羽織之儀、重立候亭主分之者絹羽織着用不苦候（下略）」とあ
るように、絹羽織の段階より質素儉約を厳しく求められたことを意味す
る。それは、次第に奢侈の傾向を強めてきた町人に対する衣服規制であつ
た。

「日記」弘化三年三月二十七日の条に、農民・町人の生活全般に互る
詳細な規定が見えるが、その中に次のように記されている。

一、在方衣類之事、

在町共絹類停止被仰付候所、弘前浦々ニ而町家之者袖口裾廻等木綿
ニ而切替、今以持来候絹類着用ニ相聞得、上着ニ至木綿類ニ而茂格
別高直上品相用得候間、右之風儀百姓家ニ押移、御締相立不申候様
相聞得候間、町家之男女共並木綿之外決而着用不致候様、在方之者

ハ上張布（コギン）小巾手代村役共兼而被仰付候通、夏冬之無差別布羽織着用
致候様、万一心得違之者者、仮令帶刀免許之者ニ而茂、見聞次第即
席脱せ、其者江御片付被仰付候様、（下略）

（傍点傍註筆者）

右によれば、町人の贅沢な美服を着用する風潮が農民へも移っている
ことが指摘され、衣服の区別によつて、農民と町人の身分秩序を維持し
ようとする藩当局の意図が明らかに認められる。

かくて、天保十二年・同十三年・弘化三年・嘉永六年の町人に対する
衣服規制が、天保期段階でさらに厳しくなっているのは、藩財政の
窮乏を救済するために、津輕藩の天保改革の一環として行われたからで
あると考えられる。同時にそれは、藩財政の窮迫が町人（豪商とその他
の商人間では富裕の度合に差があるにしても）に依存せざるを得なく
なっている状態に対し、一方では彼等を抑えることによつて、身分秩序
をあくまでも維持しようとするためであつたと思うのである。

さらに「日記」安政三年八月十一日の条に左のように見える。

一、三奉行申出候

東長町蕎麦切家業
薩摩屋

彦兵衛

右者其方子彦助儀、御制禁之衣類着用致候儀ニ付吟味之処、彦助儀
仏参之旨ニ而家より出候節、其方并妻相持候場合ニ而見当、（中略）
取押候衣類者御取上之上、日数三十日戸ノ被仰付候様、尤彦助儀右
躰御制禁を犯し候段、是又不埒ニ付、其方於手前日数廿日押込被仰
付候様、

一、碁盤縞藍結城袷羽織 壹枚

但裏海氣紐絹夏紐

一、同藍縞袷 壹枚

但裏江戸華色

一、綿入

但 (胴より上へ表裏袖共絹
其外木綿切替

一、黒博多帯 壹筋

但小柳

一、黒緬 壹枚

但黒縮緬裏秩父

右之通町目付ニ而取押、東長町関東屋嘉助江預置候旨ニ付、御取上之上家業手伝之者江入札被仰付候様、右之通被仰付候様、左候者町奉行勘定奉行ニ而取扱候様可仕旨、沙汰之通被仰付之、

右によれば、禁止されている衣服を着用した本人は二十日間の押込、舅が戸ノ三十日の刑に処せられ、没収された衣服の名称が判明する。しかし、その衣服が着用できないはずの家業手伝いの者に何故渡っているのか、疑問は残る。幕末に至って、この外にも判決例及び判決に関する記事が「日記」に散見されるのは、町人の衣服規制違反が絶えなかったことを示していることにほかならない。それは町人が財政的に豊かになつてゐるからであらう。

「日記」安政五年四月二十日の条に次のようにある。

一、三奉行申出候、近来御省略被仰付、諸町人一統夏布羽織着用被仰

付罷有候処、私共ニ而評議仕候処、御用達之儀者格別身上柄之者ニ而、他領応対茂御座候儀、場所ニ寄不都合之儀茂御座候間、夏絹羽織御免被仰付度奉存候、尤御用達共計御免被仰付候而者、外ニ先祖旧功有之者、并其身勤勞有之、御目見茂被仰付罷有候者共、帰服仕間敷候間、御用達加膽并在町御目見被仰付罷有候者共、同様御免被仰付度旨内意申出候間、文化文政之度被仰付之趣を以絹羽織着用不苦旨被仰付之、

右のことから、すべての町人がこれまで夏に布羽織を着用してきたが、有力町人は再び絹羽織の着用が認められた。そのため先祖に功績のあつた者、町人としての勤めが良好の者、御目見を許された者等にも同様に許可されたことが知られる。「文化文政之度」は前述の「日記」文化四年十二月十五日の条、同八年九月一日の条、文政十年十二月二十八日の条の衣服規制を意味すると考えられ、これらは「日記」寛政二年二月十一日の条（「御用格」同年月日の条も加えて）を基準としていたことは、既述したところである。布羽織から絹羽織への変更理由は、「他領応対云々」「場所ニ寄不都合云々」と見えることから、藩の面子を考慮してのことだろうか。藩政に一貫性がなくなつてゐることを認めざるを得ない。

以上、「日記」安政三年八月十一日、同五年四月二十日の条をあげたにすぎないが、そこから幕末の混乱の様子を垣間見ることが出来る。筆者が津軽藩士の生活を検討した際に述べたように、藩体制の弛緩が進み、藩士が封建軍団として社会の秩序を維持できない状態にまでなつていたことと連動して、町人の衣服規制はくずれ、身分秩序が崩壊に瀕している段階に至つたことを指摘できるのである。

これまで述べてきた衣服規制をまとめると次のようになる。

1、詳細な衣服規制は寛政二年以後に出されている。それは次第に経済的实力を備えてきた町人に対する奢侈を抑制する儉約令であった。

2、この規制は藩士・農民・町人間の身分秩序を維持するためであったこと。

3、有力町人と一般町人とを区別する規定が見られたことは、町人階級内の階層秩序をも維持するためであった。

4、衣服規制から見ると、町人に対する規制が農民よりもゆるやかであったように思われる。これについては別稿予定の「法令より見たる津軽藩の農民の生活」でさらに検討することにした。

5、藩財政の窮乏打開のために行われた藩政改革は、財政面で町人に大きく依存せざるを得ず、そのため衣服規制は崩れ、幕末には身分秩序が崩壊に瀕するに至った。

隣藩の盛岡藩では、町人階級内における階層差はうかがわれず、また町人の奢りがましき衣服の着用が、百姓・士階級にまでも波及するとして風俗取締りの対象となるということも見受けられず、これはやはり盛岡藩内での生活の貧困さを示すものであろうか。⁽⁹⁾といわれている。確かに農業生産力の低さが大きな理由の一つであろう（第二部第三章二衣服の規制参照）。が（これについては別稿予定の「法令より見たる津軽藩の農民の生活」を参照されたい）、右に述べた津軽藩の町人に対する衣服規制1と5と比較して、大きな相違がある。隣藩の盛岡藩がこのように異なる点については、さらに検討する必要がある。

(二)食・住の規制

最初に食についてであるが、一般的に町人には冥加・運上のほかに租税はほとんどなく、武士の生活の向上とともに富み榮え、農村へも進出した。したがって町人の食生活をみると、食道楽や食通などがあらわれている。⁽¹⁰⁾

町人一般の平常の食生活をみると、比較的質素であったと思われるが、江戸の町人は初物食いを珍重し、季節の売り物の魚・野菜を喜ぶ風習があった。⁽¹¹⁾

津軽藩に於いては、町人の階級差による食事内容、平日・会合・婚礼仏事の際に見られた食事の区別がわからず、食事の実態は不明といわざるを得ず、断片的ではあるが食事に関する規制を年代順に見ていくことにする。

延宝九年正月二十一日の「町人法度」第十七条に、

一、常々儉約を守、衣類・食物等随分軽可仕候、但定たる儀式祝儀事有之時分ハ、定式之通応分限振舞等可仕候、尤大酒乱酔等仕候者、過錢可申付候、委細町奉行可受指図事、

とある。これは贅沢を戒め、儉約を命じたものである。その中に儀式・祝儀の時には分限に応じた振舞をすること、大酒を飲み乱酔の場合には罰金を科すというものである。

「日記」安永二年閏三月三日の条に次のように記されている。

一、郡奉行町奉行九浦町奉行江、於儀左衛門宅相渡候書付左之通、

(中略)

一、在方住居之者共、一統身上之貧富年々豊凶によら須、以来雑飯給へ

可申事、

但病人并六拾歳以上之老人、祝言仏事祝儀事ニ而来客等之節、身上柄ニ而粟飯白飯給候義用捨之事、

一、正月節句盆休日等之節、粟飯雜飯勝手次第ニ給候様、粟之多少者格別、一向之白飯盤可為無用事、右之外在方一統白飯給へ候之儀、堅く停止之事、(中略)

右之通在方江被仰付候間、町家之者共并浦々之者共、右に順し衣食居之儀、随分質素相用へ奢構敷儀無之様被仰付候間、急度相守様一統可被申付候、以上、

閏三月

当町奉行中

九浦町奉行中

(傍註筆者)

これは前年の凶作によつて農民宛に出されたものと思われるが、町人も農民に準じて儉約をするよう命じられたことが知られる。その内容は、(1)平日には雑飯(雑穀・野菜等を混ぜたものか)を食べること。但し病人及び六十歳以上の老人は、祝言などの来客があつた時は粟飯と白飯を認める。(2)正月・節句・盆休日等の際は、粟飯・雑飯を食べることは認めるが、白飯は禁ずる。

右の規定によれば、正月でさえも白飯を食べることが出来なかつたことにならう。

「日記」天明二年十二月一日の条によれば、左のように見える。

一、今日大目付触左之通、

覚

当年御領分作毛不熟ニ付、町在は不及申、御家中并寺社共ニ雑飯粥等相用得、万端質素いたし、銘々取統方致覚悟様被仰出候、此旨窓触可被申触候、以上、

十二月

大目付中

これは町人・農民は勿論、藩士及び寺社関係にまでも雑飯や粥で辛抱するよう命じたものであるが、同三年七月二十八日の条にも同様なのが見える。天明二・三年は天明の大飢饉の時期であり、平常の年と比較はできない。

「日記」寛政二年二月十一日の条(第一章参照)には、町人すべてが日常の出会・婚姻・仏事等の食事は、一汁二菜を厳守するようにと見える。それ以後幕末まで、右の寛政二年の条とほとんど同じものが、「日記」享和三年八月七日の条、文化四年十二月十五日の条、文化八年九月一日の条、文政十年十二月二十八日の条、天保十二年十二月二十九日の条、嘉永六年十二月十七日の条に見える。これらによつて、食事は平常と冠婚葬祭のような特別の場合も同じに規制されていることが知られる(献立内容は不明だが)。

具体的に料理の献立は、「日記」宝暦五年十二月三日の条に見え、運送方の者達(農村の者の外に弘前・青森・鯉ヶ沢・深浦・十三の町人の名前が見え合計二七六名)に左のようなものが下賜されている。

献立

鯨

ひらめ
かなかしら
くり
しゃうか
ほうつき

汁

つみ入
皮牛房
しい茸
小かぶ

煮物

むし玉子
太串子
くし貝
漬せんまい
つくいも

飯

引而

一、焼物

かれい
香之物

御酒

肴

一、色付多古^(鮓)
一、いりこんにやく
平かつを^(干カ)

菓子

一、宇治はし
一、紅みとり
一、小落雁
一、松庭子
一、松風

(傍註筆者)

宝暦五年は凶作の年であり、運送方二七六名は飢饉を乗り越えるため藩の施策に協力し、賞されたものと思われる。したがって平常の食事の献立ではない。

『弘藩明治一統誌月令雜報摘要抄』⁽¹⁵⁾に、文政期に於ける四民の年越の料理が記されている。四民とあるので藩士か町人か明らかでないが、弘前

城下の家庭の祝膳であり、整理すると次のようになる。上流家庭では、

皿―鯨、鰯の焼物或は金頭魚

平―氷豆腐、蒟蒻、日和貝或は帆立貝

汁―氷豆腐

小皿―鮑或は生海鼠、保夜^(ほや)、鰯小串

中流以下の家庭では

皿―大根鯨に鮭塩引或は鰯

平―人参、氷豆腐、午旁、鮭塩引或は鰯

汁―銀杏、大根、田作魚^(ごまめ)

小皿―鰯の子芹和合、午旁の田麩^(でんぶ)、田作魚入れ黒大豆

であり、飯と酒がつく。

宝暦五年と文政期とは年数の隔りはあるが、献立には大きな差がないように思われる。

藩財政の窮乏により、次第に藩士が生活困窮に陥るのに対し、逆に豪商といわれる有力町人は裕福になる。これらの町人は寛政二年以降に見える、常に一汁二菜(献立内容は不明)と規制された食事を厳守し得たろうか。推定の域を出ないが、実際の食事はもつと良かったと思うのである。

以上のことから、食についての規制は儉約の観点から出されたものであるが、不明な点が非常に多い。またこの規制は堅く守られなかったも

のと推定したい。また食事は、衣のように人の目に具体的に見えない場合が多く、身分秩序維持のためには、効果的ではなかったと思うのである。

次に住について述べる。江戸では初め板葺の屋根が多く、瓦屋は贅沢であると禁じられていたが、重なる大火のため、享保頃から瓦葺塗屋造りが奨励されるようになった。⁽¹⁶⁾表側の間口は、町の惣年寄級の住宅が八間など相当大規模であるが、一般の町家はずっと狭く、間口二間以内のものが多かった。江戸の長屋は、「九尺二間」の棟割り長屋という言葉通り、わずか三坪の家に、一族が雑然と住んでいたのである。溝板を踏んでようやく歩けるだけの路地を挟んで、数戸から十数戸よりなる長屋があり、便所と、ごみ溜と、井戸とは一個所にかためられ、共同で使用されていた。⁽¹⁷⁾

一般町人の家作は長押・杉戸付書院、くしかた彫物・組物は無用とし、床縁・棧・框を塗ること、唐紙張付も禁止された。⁽¹⁸⁾

弘前城下の町屋で最も殷賑を極めたのは本町で、豪商はほとんどここに集ったことができる。ついで亀甲町・和徳町・土手町であった。⁽¹⁹⁾

宝暦八年成立の「津軽見聞記」⁽²⁰⁾に次のように見える。

一、弘前といふは御城下にして繁昌の所なり。凡そ十町四方も有へし。外に秋田よりの入口と青森への出口は一筋町にて、町はづれより十町余も出放建続てあり。本町一筋目より四丁目迄此外町々多く皆々

家建よし。此処にかぎらず領内町造りの所は都て家居は広大なり。其処にて少しも勝手よろしき町人は居宅は凡十間以上より三十間斗までもあり。(傍点筆者)

右の「約十間以上三十間ばかり」というのは、道路に面した表側の間口を意味するものと思われる。

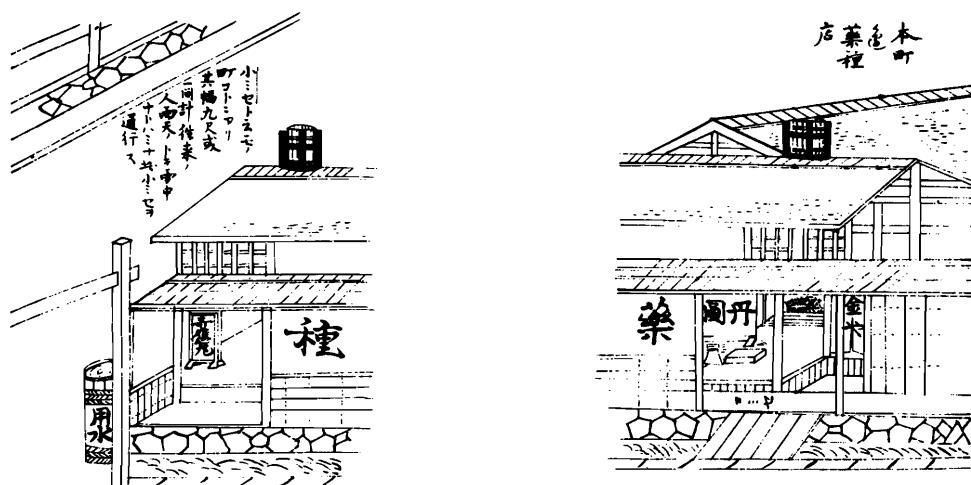
宝暦六年の「本町支配町屋鋪改大帳」⁽²¹⁾（本町一丁目～五丁目まである）に見える、まっすぐに東西に走る道路に面した本町三丁目・同四丁目の間口十間以上の家は、左の通りである。（大きい間口がすべて豪商ばかりとはいえないだろうが、一応の目安とはなろう）。

本町三丁目北側七軒のうち五軒、同南側八軒―四軒、本町四丁目北側四軒―三軒、同南側三軒―三軒、である。これは「津軽見聞記」の傍点部分の記事をほぼ裏付けるものといえよう。

天明八年から翌寛政元年までに記録したものであるという『奥民図彙』⁽²²⁾に、町家の絵が描かれている。図(一)によって見ると、それに「本町辺薬種店」と記され、板葺か葺葺と思われる屋根の上に火災予防の用水桶が見え、店先の通路に対して「小ミセト云モノ町コトニアリ、其幅九尺或一間計、往来ノ人雨天ノトキ雪中ナトハ、ミナ此小ミセラ通行ス」の説明文があり、この小店（小見世）は利用度が高い、積雪の多い地方の雁木と共通するものであった。

「日記」寛保三年八月十六日の条によれば、

<図(一)>



町家 (『奥民図彙』所収)

寛

一、百姓者不及言ニ町人たり共、弘前外住居之分者、向後桎葺之屋祇
長押打天井張厚盈用候儀無用之事、

亥八月十五日

とある。

右のことから、弘前城下に住む町人は、これまで桎葺や板葺の屋根にすることが認められていたので、町人が農村に住む家を建築しても、桎葺は許されていたものと推定できる。しかし、寛保三年八月十五日以降は、城下以外に住む町人が桎屋根にすることを禁止されたことが知られる。

農家の屋根は茅(萱)葺が原則で桎葺は強く規制されていた。⁽²³⁾藩当局では、農民が贅沢をしないように、また農村に住む町人も質素を重んずるよう指導し、身分秩序を維持するために、寛保三年八月十五日付の「寛」⁽²⁴⁾として示されたものであろう。

隣接の盛岡藩は、屋根を元文六年より瓦葺に、⁽²⁴⁾天保三年六月にこけら葺にする⁽²⁵⁾ことを認めている。八戸藩では文政十二年四月の大火後に家の建築に一定の規制をつくったとされ、桎の熨斗葺となっている。⁽²⁶⁾瓦葺は防火のためであることはいうまでもないが、八戸の町では度々の大火に遭いながらも、町家の屋根を棧瓦葺として土蔵造にしようとする発想はついに見る事ができなかった⁽²⁷⁾といわれるが、その理由は不詳である。

それに対し津輕藩では、城下に大火があつたにもかかわらず瓦葺でないのは、冬季の雪下しの便を考へてのことかと思われる。

これまで屋根・間口を中心に町家を見てきたが、年代を追つて住の規制について述べることにしたい。

延宝九年の「町人法度」第二十条によれば、家屋は町人の階層差に応じて建てるようにということが知られる。但し、交通量の多い町並に建てる時には、町奉行の指図を受ける必要があつた。それは、このような所では階層差のほかに、藩の家屋建築に対する方針があつたことを推測させる。

「日記」寛政二年二月十一日の条（第一章に示した下略の部分）に、左のようにある。

覚

在浦町々之者共、近年衣食住奢侈之風儀増長ニ付、此度御書付以稠敷御改被仰付候間、各支配所一統村役町役ニ而急度申合、御書付之趣永ク相守リ候様可被申付候、（下略）

これは農民・町人宛に出されたものであるが、衣食と共に住に対してはも儉約が命じられている。

「日記」享和三年八月七日の条に、「（上略）」一、家居之儀茂重立之者迄茂銘々商売方并用之住居之外無用之住居相省、分限よりハ手狭ニ奢構敷住居は堅停止可申付候之事」と見え、家屋は身分・階層によつて決

められた広さよりも狭くつくり、贅沢な住居を禁ずるというものである。

さらに「日記」文化八年九月一日の条には、「一、家作之儀近年造作立派ニ取立候も有之候、以来手重ニ無之様建具等上方表江注文等致候儀、堅無用申付候」とある。これは、近年立派な家を建てる者があり、そのようなことがないようにすべきである。建具などは上方方面へ注文しないよう申し付けられている。

この他に「日記」文政十三年九月十二日の条、天保十二年十二月二十九日の条、嘉永五年閏二月五日の条に、町人が奢侈増長の傾向にあるから、衣食住共に質素儉約につとめよ、という意味の儉約令が見える。

以上、住について述べたことを整理すると次のようになる。

(1) 弘前城下に住む町人の家屋は、桁葺か板葺の屋根で、冬季を除き屋根に防火に備えた用水桶があげられ、店先のコミセ（小店・小見世）で隣から隣の店へと結ばれていたことが知られる。

(2) 本町（一丁目～五丁目まである）三・四丁目には、宝暦期の史料によつて、間口の広い町家が並んでいたことが確かめられ、城下の商業中心地として最も繁栄したことが確認された。

(3) 幕末までに出された住の規制は、経済的実力をもつてきた町人の奢侈を抑えるための儉約令であつた。同時に身分秩序維持と町人階級内の階層秩序を維持するためでもあつたのである。

註

- (1) 河鑄実英『きもの文化史』（鹿島研究所出版会 一九六六年）一六八頁
 - 谷田関次・小池三枝『日本服飾史』（光生館 一九八九年）一二一・一二四頁
 - 『生活史』II（体系日本史叢書16 山川出版社 一九六五年）二四六頁
 - (2) 小袖は狭義には冬期（九月九日から三月末まで）用の綿入れで絹製のものを指す（△註1▽『日本服飾史』一二七頁）といわれ、津軽藩では絹・紬・太織を許可しているのだから、上等の絹製の小袖を禁じているものと考えたい。
 - (3) 寛政二年二月十一日の条に、「惣而下着小袖着用致候共、何色にて茂無垢小袖着用無用致候様」と見え、無垢小袖とは無垢仕立の小袖のことと思われる。西村綏子氏は「江戸時代における衣服規制について——盛岡藩の場合(1)——」（『岡山大学教育学部研究集録』四十六号 一九七七年）の中で、無垢はこれまで見てきた諸藩では見られなかった名称である。と述べられているが、隣藩の津軽藩には存在した名称といえよう。
 - (4) 市立弘前図書館蔵。「御用格」は「日記」の記事のうち公儀・規式・先例をジャンル別に書き抜き、まとめられたものである。内容は
-
- 「日記」の記事とほぼ同一であるが、その性質上、一般に簡略化されている。「日記」に洩れている記事も見られ、特に寛政本にそれが著しい。その一例がこの寛政二年二月十一日の条である。
 - (5) 『弘前図書館蔵 郷土史文献解題』（市立弘前図書館 一九七〇年）六〇七頁
 - (6) 第一章註(10)に史料を示してある。
 - (7) 註(1)『日本服飾史』一二五頁
 - (8) 第一章(10)参照
 - (9) 西村綏子「江戸時代における衣服規制について——盛岡藩の場合(2)——」（『岡山大学教育学部研究集録』四七号 一九七七年）
 - (10) 渡辺実『日本食生活史』（吉川弘文館 一九六四年）二四三頁
 - (11) 『生活史』II（体系日本史叢書16 山川出版社 一九六五年）二四六頁
 - (12) 盛田稔『近世青森県農民の生活史』（青森県図書館協会 一九七二年）一四四頁
 - (13) 第一章(10)に同じ。
 - (14) 弘前大学国史研究会編『津軽史事典』（名著出版 一九八二年）一五三頁。本章註(12)一四四頁
 - (15) 青森県立図書館郷土双書第七集（一九七五年）。著者は旧津軽藩士内藤官八郎

- (16) 太田博太郎『新訂図説日本住宅史』（彰国社 一九四八年）五二頁
(17) 太田博太郎『日本建築史序説増補第二版』（彰国社 一九八九年）一九七・一九八頁

- (27) 高島成佑・三浦忠司『南部八戸の城下町』（伊吉書院 一九八三年）一六九頁

（青森県立弘前中央高等学校教諭）

- (18) 本章註(11)二四六頁

- (19) 『弘前市史』藩政編（弘前市 一九六三年）三九五頁

- (20) 『新編青森県叢書』(三)（歴史図書社 一九七三年）四六一頁。「津軽見聞記」の序に「干時宝曆八戌寅年五月下旬津輕鰯ヶ沢の旅宿にゐて書之」と記されている。尚、この解題には、旅の一商人によつて成された作意のない記録で、庶民生活を克明に描写しており、特に経済的分野に於ける記録の豊さは、他の文学者流の紀行に望まれない所で、郷土資料として特異な存在というべきであろう。と述べられている。

- (21) 長谷川成一編『弘前城下史料』下（北方新社 一九八六年）七六・七七頁、七九・八〇頁

- (22) 青森県立図書館郷土双書第五号（一九七三年）五五・五六頁

- (23) 第一章註(11)参照

- (24) 藩法研究会編『藩法集 9 盛岡藩 上』（創文社 一九七〇年）八一六八～七八頁

- (25) 同右 下八一五〇～三一八九頁

- (26) 『八戸藩史料』（伊吉書院 一九七三年）五六四頁